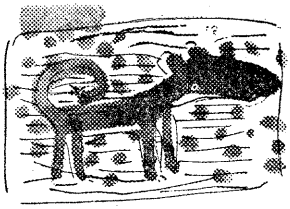

人間の家庭で育てられた

チンパンジーの子

山下　俊郎

一

以前の本誌に、狼に育てられた子どものことを書いたことがある。狼に育てられた人間の子、カマラとアマラの記録は、もうかなりいろいろの書物や論文に引用されてきたので、少なくとも子どもの問題に関心を持つほどの人で知らない人はないであろう。あの狼に育てられた子ども達の記録は、人間の持つ素質とその展開に必要な環境との関係について、わたくし達に動かすべからざる事実を与えるものであった。すなわち、人間としての素質も、人間の文化的社会的環境の中で生活しなければ展開されないこと、そしてまた、人間の社会的文化的環境へと復帰すれば、人間的文化生活へともどる可能性が秘められていること、この二つの基本的事実をわたくし達に教えてくれるものであった。

そこで、今度は、狼に育てられた子どもと逆の場合、といってもいいような一つの実験的研究の記録を紹介してみよう。それが標題にかかげた家庭で育てられたチンパンジーの子の記録である。

二

アメリカの心理学者、ヘイス夫妻は、チンパンジーの子ども――ヴィキィと命名されている――を生後数日目から、自分の家庭にひきとって、人間の子どもを育てるのとまったく同じやり方で育ててみた。この報告は、ヴィキィが満三歳になるまでについて述べているので、それ以上のことは分らないが、興味深いものがあるので紹介してみたい。

ヘイス夫妻が、チンパンジーの子どもを家庭で育ててみるという実験をやったのには、二つの目的があった。その一は、チンパンジーの子どもを、ふつうの家庭で、人間の子どもとまったく同じ条件で育ててみて、それを人間の正常な子どもと比較してみることであった。こうして比較してみると、人間の子とチンパンジーの子とは全くおんなじ環境で生育したのであるから、もし両者の間に差異が出てくるとすれば、それは両者の間にある遺伝的素質の差――すなわち人間とチンパンジーという――に基くものであるということになるので、遺伝的素質の力がはっきりとつかめるのである。さらにもう一つの第二の目的は、この家庭で育てられた同じチンパンジーを、同じ仲間のほかのチンパンジー、実験用として研究室のおりの中に飼われているチンパンジーと比較してみることであった。この場合は、研究室のおりと人間の家庭という二つの相異る環境の中でおなじ素質を持つチンパンジーが育つのであるから、両者を比較して、もし違いが出てくればこれは環境の影響によるものと断定できるわけである。こうして、理論的に二つの面からの問題の解決ができるのでヘイン夫妻は、チンパンジーの子を育てるという実験を行ったわけである。

いま当面の問題としては、わたくし達はヘイス夫妻の二つの目的のうちの第一の目的に関連して考えてみることにしたいと思う。

三

ヘイスの行った実験的観察の結論に対しては、多少はわたくし達の常識的な推論が出来得るであろう。すなわち、チンパンジーと人間とは、すべての動物のうちでもっとも近い動物である。しかも、進化論的に考えると、いわゆる個体発生は系統発生を繰り返すという原理が行動の発達の面にも妥当することが、認められているのであるから、少くなくとも、いまここに問題としているような発達の初期、すなわち生後三年間の比較を行うならば、チンパンジーの行動の発達と人間の行動の発達との間には、恐らく緊密な並行関係があるだろうと予測されるのである。

そして、事実、ヘイス夫妻の結論は、わたくし達の予想とまったく一致している。すなわち、全体としていうならば、ヴィキィの発達は正常な人間の子どもの発達と緊密な並行関係にあり、彼女の興味も能力も人間の場合とまずまず同じ順序で、また同じ速さで発達していることが認められている。もちろん、人間の子どもと多少の違いはあるが、全体としては、人間の子どもの発達とほぼ並行関係に在るといえるのである。

まずヴィキィの一日中の行動を見ると、まさに人間の外見と同じように、大部分の時間を遊びに費している。この遊びというのは、現在直接には個体の生物学的要求を満しているものではないので、いわば現在の生活的効用はないものである。もちろん、遊びは将来の生活にはひじょうに重要な関連を持つのではあるが、現在では何らの効用もない。しかも、この活動に没頭するという所に人間とチンパンジーの類似性があるというのは誠に面白い事実である。

もちろん、ヴィキィの遊びは、人間の子どもの遊びにくらべると、走る、よじのぼる、とぶというような運動的な遊び、しかもあちらこちらと居る場所を移動するような遊びがひじょうに多いという点において違いが見出される。こういった活動的——身体運動的といった点においてヴィキィは人間の子どもとちがっている。それは恐らく、人間とチンパンジーという移り違いに基く本質的な違いなのであろうと、ヘイス夫妻はいっている。

しかし、このようないわば全身的運動による運動的遊びばかりにヴィキィは全部の時間を費しているわけではない。そして、全身的運動のみが発達して、いわゆる手先きの器用さが発達していないわけではない。たとえば、人間の子どもと同じように、積木をつむこともするし、スプーンを持って食事することもできる。とくに人間の子どもが一—二歳頃に周囲の大人の行動をさかんに模倣するのと同じように日常行動の模倣によるごっこ遊びに近いような遊びもやっている。たとえば、ヴィキィの大好きな遊びの一つとして挙げられているものに、電話ごっこがある。すなわち、電話器のダイヤルをまわす遊びが大好きで、ヘイスの報告にはその写真がのせられている。

四

いま右に述べてきたような行動の間においては、わたくし達はチンパンジーと人間の子どもとの類似性の方に注意を奪われ勝ちなのであるが、一つはっきりと両方の違いの現われる面がある。それは音声の面である。

ふつう、人間の子どもは、赤ん坊の時代から有意味にせよ無意味にせよ、ほとんどしじゅう何か知らしゃべっている。というより音声を出している。これが発達の低い段階の無意味の音声では喃語といわれるものであり、発達した段階では有意味の言葉になるのである。とにかく、人間の子どもはどの段階においても相当の程度に、そして絶えず音声を出しているのが普通である。ところが、ヴィキィはだまっている。生後一年の間はときどき多少は喃語めいたものをしゃべった。そして、いまも時としては何か知ら声を出す遊びをして

はいる。しかし、そのだんまりの程度においてはとうてい人間の子どもと比較にならないくらいだまっているのである。

ヘイス夫妻は、ヴィキィの音声の調子をよく観察して、その発音に必要ないろいろの発声器官のコントロールがうまく出来ていないことを見出した。たとえば、唇の形などを見てそのことを確かめたのである。そして、一生けんめいに発音練習を試みた。「ママ」というような発音をさせるように試み、また、「パパ」というような発音をさせるように努力して、とうとう数語がようやく発音できるようになった。しかし、あわてて言う場合には、「ママ」と「パパ」をごっちゃにしたり、「パパ」と「ミルク」をごっちゃにしてしまうというようなことが起って、しばしば混乱してしまっている。そして、その発音もしゃがれたような声で満足な声ではない。このようなことは、人間の子どもの場合、三歳ではあり得ないことである。人間の子どもは、三歳になれば、もう日常の用には事欠かない程度の言葉をじゅうぶんに操ることができる。

言葉の発達には、言語的環境がひじょうに重要であることが認められている。この点において、ヴィキィは、アメリカの心理学者夫妻という文化的に見て程度の高い家庭の中で人間の子どもとまったくおんなじに育てられたのであるから、言語的環境においては、人間の子どもに劣らない。むしろ、同じアメリカの文化的に低い下層階級よりもすぐれた言語的環境にいるのである。したがって、言語の発達に環境のみが有意義であるならば、ヴィキィは当然人間の子どもなみに話が出来るはずである。ところが、それができないのであるから、その規定条件は何かというと、人間とチンパンジーという種の素質的差異にもとづくものと考えざるを得ないのである。

五

チンパンジーの子どもと人間の子どもとは、その幼時においては、ある程度並行的に発達する。しかし、言葉の発達においては全然様子がちがう。それは種の違いに基く遺伝的素質の違いによるもので、人間が言葉を持っているということは他の動物の持たない文化財を持っているということなのである。

素質のない所には能力は育たないということを、ヴィキィはカマラやアマラと逆の方向から証明しているのである。

＊　＊　＊

（筆者は東京都立大学教授）